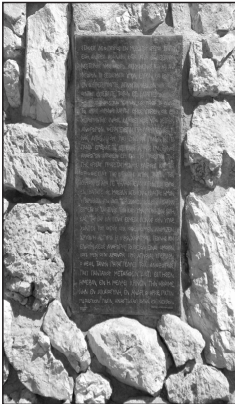


# 看護研究の方法論としての 解釈的現象学

田中 美恵子<sup>1)</sup>



- ④ 質的研究の定義:  
**質的データ**(研究目的に沿って収集され、記録された言語)を用いて、研究下の現象の**意味の解釈**を行う研究。
- ④ 解釈的立場 interpretive stanceに基づく研究  
ある文脈に置かれた人々にとっての**現実reality**を明らかにしようとするもの
- ④ 質的研究＝解釈的研究  
interpretive study

1

実証主義的立場と解釈的立場における  
科学哲学・パラダイムの違い

- ④ **伝統科学(実証科学)**  
実証主義的立場に依拠  
「現実とは1つであり、世界は単一、同一である」  
「客観的な現実とは絶対的なものとしてそこにあり、私たちは理性を通じて、唯一無二の真理に近づける」  
「真理は、状況、歴史、価値、主観を越えた普遍的なもの。観察・実験・測定という客観的な方法を用いてこの真理を捉える」

4

…私は現象学を一つの理論体系とか、ましては形而上学のたぐいとは考えない。それはあくまで開かれた方法論的態度なのである。(中略)この方法なるものを料理の「作り方」とか自動車の操縦の「仕方」のような一定の結果を保証してくれる一連の「手続き」と考えるとすれば、それは論外である。方法とは本来、デカルトの解析の方法やヘーゲルの弁証法がそうであったように、思考のスタイル、研究対象に立ち向かう態度のことなのである。

木田元『現象学』より

2

## 解釈的立場の前提

- (1) 単一の現実はない。すなわち、現実とは知覚に基づき、各人によって違い、時とともに変化する。
- (2) 私たちが知ることは、与えられた状況、文脈の中でしか意味を持たない。



5

## 「解釈」という営為

- ④ 「質的研究」の底にある現象の「解釈」という営為  
↓  
マニュアルには還元されない
- \* データを細分化し、寄せ集めて積みあげたとしても、それだけでは意味にはならない。本質には行き着けない。
- ④ 事実経験とは区別される「本質経験」(事実と本質の共軛不可能性)＝「了解し解釈に仕上げること」⇒「開かれた態度」
- ④ 解釈的現象学の研究は、もっともマニュアル化がなじまない。
- ④ なぜなら、それは「方法論的態度」のことを言っているに過ぎないから。

3

## 現象学について-デカルトからハイデガーへ

- ④ 実証主義: 「人間の理性は世界の客観を正しく捉えることができる」という前提
- ④ 「哲学的真実は主観と客観の一致である」(デカルト以降の近代哲学の大前提)
- ④ デカルト: 主観と客観の一致をどう保証するか?  
↓  
疑って疑う余地のない原理＝「疑う(考える)我」  
「考える」働き＝人間の理性 (真理が宿る場所)

6

1) 東京女子医科大学

### デカルトの主客二元論

人間が花をみる行為を2つの側面に分裂

- ☞ 人間における花の像 (主観)
- ☞ 認識されるべき対象物としての花そのもの (客観)
- ⇔ 「世界は客観的に存在するという大前提」



7

### 現象学的存在論の誕生

- ☞ 人間が存在していて意識がある。仮に「純粋意識」があるとして、人間がそこにあり、そこで世界が構成される。「そうした人間のあり方はどういふものか？」
- ☞ 「純粋意識」そのものを担っている人間存在のありよう、世界がそこで構成されるような**人間のあり方(存在様式)**をこそ問うべき。
- ☞ 「存在」**Sein**の意味を問う存在論(現象学的存在論)の誕生。

11

### フッサールの実証主義批判

- ☞ 「実証主義は実用的な効果ばかりを追い求め、人間の理性の問題を切り捨て、学の理想を見失ってしまった」(『ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学』)
- ☞ デカルト以降「客観世界が存在していて、それを意識がどう受け取るのか？」
- ☞ フッサール: この順序を逆にして考えようとした。  
「人間が意識の中で客観世界の像をどのようにして構成し確立させるのか？」という問い⇒意識の「ありのまま」を言い表すことで答えようとする(『デカルト的省察』)「事象そのものへ」  
⇒「主観」と「客観」は相即不離のものとする

8

### 解釈学的方法

- ☞ 「**現存在**」**Dasein**: 存在の意味が自らをあらわにする場面。
- ☞ 現存在のあり方は、ただ、当の現存在自身が自らを示す通りに自分でみていくしかない。＝解釈学的方法
- ☞ 絶対者の観点からの「**上空飛行的思考**」の排除



12

### 後期フッサール

- ☞ 「**純粋意識**」(理性、超越論的主観)(エポケーの後にも頑として残るもの)の発見を経て、
- ☞ 「**生活世界**」での経験の記述
- ☞ 「生活世界」: 日常的に行為している世界、科学の枠組みで捉えられる以前の体験的世界
- ☞ 知らず知らずのうちに自然科学の枠組みによって規定されてしまっている「**自然主義的態度**」の克服(エポケー「括弧入れ」)

9

現存在の現象学は根源的な語義における解釈学なのであって、その根源的な語義に従えば、この語は解釈の仕事を表示している。

『存在と時間』



13

### ハイデガールのフッサール批判

- ☞ 「純粋意識」としてのみ意識が扱われる限り、その意識はどこまでも普遍的な本質構造であって、「今ここ」に存在している具体的な志向作用を行う個別の意識ではない。
- ☞ フッサールは、意識そのものの存在性を不問に付してしまっている。
- ☞ 「純粋意識」は、普遍的な本質構造であり、個別の意識ではない。果たしてそういったものがあり得るのか？という批判。
- ☞ 「**世界がそこで構成されるような存在者のあり方はいかなるものか？**」という新たな問い、**存在論的問いの誕生**。

10

### 「世界-内-存在」と解釈学的研究

- ☞ 「時間性」という規定を受けた「**氣遣い**」としての人間存在のあり方(「世界-内-存在」として抽出)
- ☞ 世界とは、そこで構成される意味の関係性の全体(意味の連関)からなるのであり、そうした世界を場として世界内部的な個々の存在者が意味づけられる。「**世界はけっして存在するものではなく、世界として現出するのだ。**」
- ☞ 研究的な観点: 人間の経験を理解するには、**人がどのような「意味連関」の世界を作り上げているのか**ということを探求することが課題となる。
- ☞ 逆から言えば、或るものの意味とは、或るものか或るものとしてそこから理解されるような、**全体的な意味の連関を抜きにしては語れない**ということになる。→**文脈を重視する解釈学的研究の方法**。

14

## 解釈学的方法

- ④ **解釈学hermeneutics**: テキストの解釈および分析に関する理論の学。聖書研究などのテキスト解釈の技法から発展。
- ④ Hermeneutik(独): 神の名ヘルメースHermēsと語源を同じくするギリシア語のhermēneiaから出自。
- ④ ヘルメース: 神と人間の間を仲介し、神の思想を人間に伝える者。無限なるもの→有限なるもの。神の精神を感覚的な現象に翻訳する役割。そこから、ヘルメースは、わからせることに属する一切のもの、特に言語と文字の発明者とされている。
- ④ 解釈学は、異なる言語で書かれた文献を翻訳(解釈)する文献学として、また聖書に代表されるようなテキストを人が理解しやすいように解釈する学、すなわち**意味の解釈の理論**として発展。この語の古い語義は、他人の語をわかるようにすること、すなわち、「通訳」であった。(和辻より)

15

## 解釈的現象学に基づく研究方法

- ④ 解釈学的研究方法: 存在論的立場から、テキスト解釈を通して、日常的な営みや人間的経験の意味を捉え、理解に到達することを目標とする方法論。
- ④ 人間の経験の意味を捉えるのにもっとも適した方法。

19

## 解釈学

- ④ **一般解釈学**: シュライエルマッハーによって成立。  
「著者がおのれ自身を理解していたよりもいっそうよく著者を理解するのが解釈学的方法の最後の目標である。」
- (1) 解釈学は理解の技術である。
- (2) テキストの意味はそのテキストが想定した最初の読者の問題である。
- (3) テキストの一部の意味はテキストの全体の意味に左右されるし、その逆もまた起こりうるのだから、解釈とは円環的なプロセスである(= **解釈学的循環**)。
- (4) 誤解はテキスト理解の前提条件である。

16

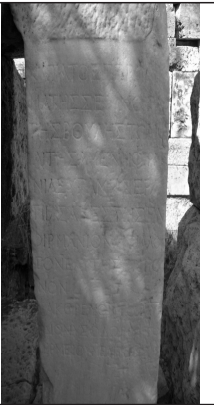
## 解釈学的研究方法

- ④ 人間は、時間性という規定を受けて、世界のうちにありつつ、事物または他の現存在に対して意味を形成しながら、かつ自己了解的に存在する。
- ④ 人間は基本的に諸事物が自分にとって意味をもつこととなるような解釈的存在である。
- ④ ゆえに、人間の経験を理解するには、研究対象となる人間の了解によって、世界がどう開示されているのかについての、研究者の解釈を必要とする。

20

## ディルタイによる解釈学の定義

恒久的に固定された生の表示の、技巧的な了解のことを、私たちは**解釈(Auslegung)**とよぶのである。ところで、**精神的な生**にとって、その完全な、遺漏のない、したがって客観的把握の可能な表現は、ただ**言語表現**だけである。だから、**解釈が完結するのは、人間の生存の、文書に含まれている名残りを、解釈することによってである。この技術が文献学の基礎である。そして、この技術の学問が解釈学(Hermeneutik)なのである。**



17

## ベナーによる解釈的現象学の看護研究への導入

- ④ ベナーのハイデッガー解釈: ドレイファス, H. L. のハイデッガー解釈に依拠。+メルロ=ポンティの影響。
- ④ ドレイファスのハイデッガー解釈の特徴(門脇)  
『存在と時間』の第一部第一編に限る。  
(1) 技能の現象学-表象的志向性批判  
(2) 事物的存在性の問題-自然科学的世界像  
(3) 『存在論』を『心理学』から分離すること

21

## ハイデッガーによる解釈学の哲学的方法への応用

- ④ ハイデッガー: ディルタイが哲学に導入した解釈学的方法を、存在の探究に応用。解釈学的現象学による存在論を展開。
- ④ 人間存在の研究には解釈が必須であるとし、そのような解釈がもっている循環の構造(「**解釈学的循環**」)を詳細に指摘。解釈学的方法を現代哲学に導入。
- ④ ハイデッガーの流れを汲む**解釈学**: 人間の経験が表現される象徴(言葉や身振り)の解釈を通して、人間的経験の意味を問うテキスト解釈の学として発展。

18

## ベナーの解釈学的研究方法(Benner,1985)

- ④ **ハイデッガーの現象学に基づく解釈学の前提**  
(1) 人間存在は自己解釈的である。この解釈とは、単に自己というものを所有するというのではなく、それは自己を構成していくことである。  
(2) 人間存在であるということは、その存在は一つの現出である、つまり、人は自分がどのような存在であるかを自らあらわにするものであるということの意味している。  
(3) 自己は根本的に意味を自由に決定するものではない。個人にとって持つ意味は変更可能だが、それは特有の言語、文化、歴史によって限定を受けている。

22

### 解釈学的研究の特徴(Benner,1985)

- ⑦ 解釈学は、状況の中にある人間の研究を可能とし、健康と病いという現象的な諸領域を研究する方法を提供し、極端な主観性または客観性という問題を克服する。
- ⑦ 解釈学は、技能、ストレス、コーピングの中に埋め込まれている日常の営み、意味、知識を理解するために用いられてきた。
- ⑦ その目標は、日常の営みや、健康と病いの経験を理解することである。
- ⑦ この方法は、特に健康と病いの現象世界の理解にとって有効である。この方法は、健康と病いの体験によって切り取られるがままの疾患の理解を増大させる。
- ⑦ 解釈学的現象学は包括的であり、人や状況を変数に分割し、それをまた元に戻して一緒にするというよりは、状況の中にある人間を探求しようとする。

23

### データ収集方法

- ⑦ データ収集：参加観察・インタビュー
- \* 日常の営みにおける意味を、それらが破壊されないよう、歪められないよう、脱文脈化されないよう、月並み化されないような方法で取り出す。



27

### 解釈学的研究の特徴(Benner,1985)

- ⑦ 言葉や文化を通して伝えられる前もって理解される「背景」が、日常の営みや自己解釈を基礎付ける。背景は、個人に可能性の条件を与え、知覚や行為やその他諸々の事のための条件を与える。この背景こそが人間存在を、そのストーリーを要素要素の積み重ねで作り上げねばならないコンピュータのような人工知能と分かちつものである。人間存在はすなわに状況にストーリー、前もっての理解とともにやってくる。
- ⑦ この立場は次のことを仮定する。すなわち、背景の意味、技能、営みは、完全に合理化されるものではない(完全に明瞭にすることはできない)。
- ⑦ 背景は可能性の条件を形作る。背景は伝えられるものであり、個人によって引き出されるものではない。
- ⑦ 意味は単に個人に住むのでもなく、状況に住むのでもない。意味はこの2つのもの間に起こる。その結果、個人は構成し、また状況によって構成される。したがって、分析の単位は、2つのもの間に起こることである。

24

### 解釈方法

- ⑦ テキスト全体のシステムティックな分析
- ⑦ テキスト諸部分のシステムティックな分析
- ⑦ 諸部分に対する全体の関係
- ⑦ その逆を理解するために、2つの解釈を比較することを含む。



28

### データ収集の目標と道程

- ⑦ **データ収集の目標**：日常の営みを具体化する例題(exemplar)や、範例(paradigm case)を発見すること。
- ⑦ 単に特殊なものだけではなく、**共通性や類似性にも着目**。
- ⑦ **文化的な基盤をなす意味における共通性の探求をも目指す**。



25

### データ解釈における留意点

- ⑦ 解釈者は、意味、状況、実践、身体的経験の中にある共通性を探し求める。
- ⑦ 解釈者は自らが持っている距離やパースペクティブを、生きられた状況の直接性を理解するために活用する。
- ⑦ しかし、この体験から距離を置いたパースペクティブは、状況の中にいる人を考慮に入れたものでなければならぬ。解釈者は、テキストとの対話に従事する。
- ⑦ 解釈者の姿勢も、理解し参加者の世界に想像的に住み込むことから、他者として距離をとり参加者の世界を問うことへとシフトする。解釈的研究者は、理解→解釈→批評のサイクルに従事する。
- ⑦ 方法論として、明確な表現の合理性を死守する。

29

### 共通性探求のための5つの道標 (Benner & Wrubel, 1989/1999)

1. **状況**：歴史的・文化的に、どのように人が状況に根ざしているかに関しての理解。
2. **身体性**：身体に根ざした知(embodied knowledge)の理解。身体に染み付いた状況理解の探求。
3. **時間性**：生きられた時間経験の理解。
4. **関心事**：何がその人にとって重要な理解すること。
5. **共通する意味**：人々の間で分け持たれている共通する意味の理解。言語的・文化的であり、当たり前すぎて気づかれていないような意味の理解。(「人間は共通の意味への参加者である。」「身体化」という共通性を伴った世界への参加によって、知覚は共通で分け合うことができ、相互に受け入れ可能となる。」という前提に基づく。)

26

### データ解釈と発表のストラテジー

- ⑦ **範例paradigm case**：ある意味群の特定のパターンの強力な例。一旦、範例が確認されると、同じような全体的特徴を持つがよりはっきりしないその他のケースも確認される。
- ⑦ **例題exemplar**：範例よりは小さいが、特定の意味に満ちた相互連関(transaction)や、意図または能力の強力な例。ある特定の意味連関(transaction)の肖像画、または物語。
- ⑦ **テーマ分析**：解釈者はデータの中にある共通のテーマを明らかにし、読者に証拠を示すために、十分なデータの抜粋とともにそれを示す。共通の意味を提示するために有効。

30

- ④ コンテキスト、行為者の意図、状況の中にある意味を提示し、その結果、読者は客観的な特徴が全く違うと思われるような他の状況でも、同じ意味を持つやりとりを確認することができる。
- ④ 解釈学的研究方法における目標: グランデッドセオリーのように、抽象化された理論的用語や概念を発見することではなく、意味ある言葉を見つけ出し、理解に到達することである。

31

## 文献

- 田中美恵子: 解釈学的現象学が開く臨床看護研究の地平、『山内典子: 看護をとおしてみえる片麻痺を伴う脳血管障害患者の身体経験』所収、すびか書房、2007。  
 山内典子: 看護をとおしてみえる片麻痺を伴う脳血管障害患者の身体経験、すびか書房、2007。  
 Benner, P. (1994) (相良ローゼマイヤーみはる監訳、田中美恵子、丹木博一訳): ペナー解釈的現象学—健康と病気になる身体性・ケアリング・倫理、医歯薬出版、2006。  
 木田元: 現象学、岩波新書、1970。  
 デカルト(1637) (落合太郎訳): 『方法序説』、岩波文庫、1953。  
 フッサール(1936) (細谷恒夫訳): 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、中央公論社、世界の名著所収、1980。  
 ハイデガー(1926) (原佑・渡辺二郎訳): 『存在と時間』、中央公論社、世界の名著所収、1980。

34

## お薦め研究例

- ④ 山内典子: 看護を通してみえる片麻痺を伴う脳血管障害患者の身体経験: 発症から6週間の期間に焦点を当てて、日本看護科学学会誌、27(1):14-22, 2007。
- ④ 山内典子: 看護をとおしてみえる片麻痺を伴う脳血管障害患者の身体経験、すびか書房、2007。
- ④ Gordon, G. : がんを巡る曖昧さと隠蔽の倫理-イタリアの一地方世界を通じた解釈、Benner, P. (1994) (相良ローゼマイヤーみはる監訳、田中美恵子、丹木博一訳): ペナー解釈的現象学—健康と病気になる身体性・ケアリング・倫理、医歯薬出版所収、2006。

32

## 文献

- 和辻哲郎: 人間の学としての倫理学、岩波全書、pp.236-262, 1934。  
 デルタイ(1900) (久野昭訳): 解釈学の成立、以文社、1984。  
 Benner, P. : Quality of life: A phenomenological perspective on explanation, prediction, and understanding in nursing science, Advances Nursing Science, 8(1) :1-14, 1985。  
 Dreyfus, H.L. (1991) / ヒューバート・L・ドレイファス (門脇俊介監訳): 世界内存在—「存在と時間」における日常性の解釈学、産業図書出版、2000。  
 門脇俊介: アメリカのハイデガー—ドレイファスのハイデガー論、ヒューバート・L・ドレイファス (門脇俊介監訳): 世界内存在—「存在と時間」における日常性の解釈学、産業図書出版所収、2000。  
 Benner, P. & Wrubel, J. (1989) (難波卓志訳): ペナー／ルーベル現象学的人間論と看護、医学書院、1999。

35

看護する側の視点を患者の内側へと変化させることによってみえることがたくさんある。

山内典子: 看護をとおしてみえる片麻痺を伴う脳血管障害患者の身体経験、すびか書房、2007より

33